

---

# ラブでコメディな関係

天空 羽音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ラブでコメディな関係

### 【Nコード】

N4848E

### 【作者名】

天空 羽音

### 【あらすじ】

「バカじゃないの？今度の今度こそあなたには愛想が尽きたわ。もう終わりよ！ホントにお終い！！この関係は解消させてもらうから！わかったわね！？」「…っ」

一方的な感情（6/18掲載）（前書き）

テーマ事に完結型です。

登場人物たまに増えますが主に2人の会話メイン

里桜 160センチ

ちよい勝ち気な23才のOL 肩より少し長い茶髪

修司 179センチ

愛想はピカ1会社員 26才

クセのある黒髪

只今同居中（同棲）

余談：ストーリーだけ浮かんで書き進めたので最初は名前とか出てきません

徐々に名前付けていきます

一方的な感情（6 / 18 掲載）

バンー！！

リビングのテーブルに手を付いて立ち上がり相手を睨み付け

「バカじゃないの？

今度の今度こそあなたには愛想が尽きたわ。もう終わりよ！ホントにお終い！！この関係は解消させてもらうから！わかったわね！？」

「…っ」

もう一度キツと睨み付け寝室に走った。

全く何て事だろう。

ロマンチックを求めているわけじゃないけど…

あそこまでデリカシーのない奴だったとは…

おまけに存外に忘れられて腹が立って仕方がない

寝室に入って押し入れをガラツと開けて頭を突っ込んだ私の後ろから

「お…おい…」と奴の声

「うるさい！話しかけないで！あなたの顔も声も聞きたくないのよ！」

目的の物を引つ張り出し今度はタンスの前に駆け寄った。

後ろから狼狽えながら様子を見てる奴の存在にも今は腹が立つ！

「だ…だけど」

「うるさい！話しかけないでって言うてる！」

「…っ」

タンスを開けて押し入れから出してきたポストンバックに洋服を次々放り込んだ。

「ちょ…ちょっと待て。何してるんだよ」

「見れば分かるでしょ？荷物まとめてるの！」

「だから落ちつけて」

「落ちついてる！」

「いやいや。出て行く用意をしている事態、落ちついてないって…とにかく冷静になれよ」

「とつても冷静！」

そう、私は激しい怒りの中にもかかわらずホントに冷静だった。

最後にシャツをバックに放り込んだ途端

「お前何やってんだよ！」

「見ればわかるでしょ！」

「だけどそれ…」

ドアの前で行かせまいと仁王立ちになり両手を広げてる奴をチラッと見て立ち上がりパンパンに膨らんだボストンバッグを抱えベランダに走った。

「お…お前待て…」

鍵はまだ閉めてなかったからすんなり開く。

ここは二階

「待てって…早まるな…」

背中から追いかけて来る奴の声を無視して向かいの薄暗い空き地をめがけてボストンバッグを力任せに放り投げた。

「うわあ…俺の荷物…」

「そうあんたの荷物！だから出て行けえ…！」

「バカやろう…（泣）取ってくるからドアのチェーンすんなよ！」

バタバタ廊下を走ってく奴の足音を聞きながら、初めてデートした記念日を忘れてた事もせつかく作ったポトフのハート型の人参を足袋みたいだなと笑った事も許してあげようと思った。

男のロマン(前)(6/19掲載)

「ただいま」

パタパタ

「おかえりー」

えっ!!

オレは玄関で固まった!

は…は…裸エプロン

うひょ〜マジマジ?

男のあこがれをやつと理解してくれたんだな

白のフリフリじゃないけど黒のシンプルなやつも結構いいんじゃない?

ミニスカみたいに短い

顔も思わずゆるむぜ

「何だか顔エロいよ?ニタニタしてきしよいんだけど?何かいい事あった!？」

なーんて惚けちゃってこいつも結構可愛いところあるじゃん。

「いやいや。お前を見たら誰だつてそうなるだろ?」  
つて誰にも見せてたまるかよ。

オレでさえ初めてなんだから冗談じゃあねえよな

「はあ？…あんた何言ってるの？意味わかんないんだけど…どっかで豆腐の角にでもぶつかってきたんじゃないでしょうね？豆腐がもつたいない」

いつもならカチンとくる所だが今日のオレは違つぞ。

何言われても全然へっちゃらだぜ！

あれっ？ふと足元を見ればビールケース…

オレは缶より瓶ビール派だから定期的に近所の酒屋から配達してもらっている。

まあダチと外で飲む時は缶ビールも飲むけどさ。

やっば家で飲む晩酌はさ

こいつの手酌で一杯が五臓六腑に染み渡って旨いんだよなあ  
手酌が合うのは瓶だろ！

だけどまさか…？

自然に眉間にシワがよる

「…どうしたの？瓶ビールの銘柄違ってない…よね？それとも違うのが良かったの？」と不安そうに聞いてくる。

落ち着けオレ！

動揺を隠して冷静に聞くんだ。

男のロマン(後)(6/21掲載)

「酒屋は…いつきた？」

「えっ？さっきだけど？エレベーターで会わなかった？ってタイミング」

「…っ！よくも酒屋めオレより先なんてふざけやがって…今度会ったらただじゃおかねえ(怒)」

「あのさ…何怒ってんだか知らないけどさ 酒屋さんの前に新聞屋さんも来たけど？」

「何だと？あーでも新聞屋って80の爺様だったよな？爺様は冥土の土産に許してやる」

「うっんお爺ちゃんさあ今日はお茶屋さんのお婆ちゃんと歌舞伎デパートで居ないからっってお孫さんが集金廻りしてるよ」

「な…何だと(怒)孫ってアレだろ？あちこちでスカウトされてるイケメンだろ？」

「そうそう。間近で見たけどアイドルにも負けない笑顔だったわよ。フッフ」

頬染めてフッフじゃねえよ

沸々と怒りがこみ上げてきて爆発寸前だが耐えるオレ！くそオ

「あっ？あとそれ」

「な…何だよ。まだ誰かきたのかよ？」

「うん。修司のお父さんが同窓会の八ガキ持ってきたわよ」

親父がオレより先だと？

「ふ…ふざけるなあ（爆）」

「ふざけてないけど？」

「何でオレが一番じゃないんだよ？」

「さっきから何なわけ？理由わかんないしマジ豆腐ぶつけた？」

「違う！そもそもお前は恥ずかしくないのか？」

「はっ？あたしのドコが恥ずかしいって？」

「そそんな、裸エプロンして人前にでやがって！」

「…！！このあほんだらあ！よく見なさいよ（怒）」とクルツと背を向ければキャミとシヨーパーン…

あっ！良かったと笑いかけようとしたら、パタパタと近寄ってきてガチャッと玄関のドアを開けられドン！！と肩を突き飛ばされ外へと出された。

「お…オイ！」

ボタンと目の前でドアが閉まりガチャガチャと鍵が…

「ま待て！開ける！」

ドアの向こうから

「あんななんか知らない！実家に帰れ！！（怒）」

バカやるゝ男のロマンを返しやがれゝ（泣）

その前に鍵も開けてくれ

容疑者（前）（6 / 23）

本日は晴天なり

「こんな天気の良い日に私達といて良かったの？まあ彼氏がいない私的には付き合ってもらって嬉しいけどね。彼氏いいの？」と真帆。

「そうだよ。あの里桜にラブラブな彼氏置いてきて泣かれなかったか？」と水城

彼女達は会社の同僚で仲の良い友達

今は3人で渋谷をブラブラとショッピング中。

「今日は午後から同窓会だから修司も忙しいの」

「同窓会って中学か？」と水城が聞けば

「高校？」と真帆

「ん？高校だったかな？」

「だったかな？って何よ」

「そうだよ。ちょっとは危機感持ちな」

「えっ？なんで危機感？」

「高校の青春と真ん中の片恋とか元カノとの再会とかいろいろあるだろ」

「卒業から5年。同窓会での再会から付き合う確率って高いのよ」

「それで失恋する確率も比例するんだからな」

そんな事、まったく考えてなかったな。

とボンヤリしてたら

「考え事しながら歩いてたら危ないでしょ」と  
真帆に腕を引かれて

「お茶しよう」と先を歩いていた水城が手をふるから大人しく着いて言った

なんでミスドかな？

高校生が沢山いてますます落ち込みそう…

「やっぱり疲れたり落ち込んでる時は甘い物よ」

「ここなら長話しても珈琲とカフェオレはおかわり自由だしな」

「「で？」

身を乗り出して2人で

「で？」って何なのよ」

「そんな困った顔すんな」

「そぞ。私達が危機感チエックしてあげるから」  
危機感チエックって何？

「まず容疑者の八ガキを見た反応は？」

「まだ容疑者じゃない。ハガキは喜んでたよ？」

「昨日はどんなだった？」

「ん？洋服選んでた」

「服装は？」

「スーツにしたみたい」

「友達の名前は聞いた？」

「寝言でみつちやくんて枕抱きしめてたけど？」

「「それだ（よ）！」」

だから2人で身を乗り出してくるのやめて〜

容疑者（中）（6 / 24）

結局ミズドで3時間も話し込み夕飯は修司もないし家で食べよう  
ってなった。

材料は2人が手土産代わりに会計してくれたけど作るのは私で

豚キムチ、チヂミ、餃子、ご飯、味噌汁。

ちよつと中華にまとめてみたけど水城のリクエストで味噌汁はなめ  
こだった

後片付けは2人がしてくれたから楽チン。

「そついえば容疑者もう帰ってくる?」

時計を見たら9時

「うん。そろそろかな?」

「じゃ帰るね」

「帰る。容疑者に会ったら

「吐け!」っていいそうだからな。クックッ」

「まったくバカな事言っていないで2人とも気をつけて帰ってね」

「うん。」  
「ちそつさま」

「ゴチ！旨かったよ」

「「じゃ！おやすみ」「」

玄関で見送って部屋にもどりクッション抱えてラグに転がってたら眠くなった。

…ピンポーン

ん？こんな時間に誰よ。修司？酔ってるのかな？

ピンポーンピンポーンピンポーンピンポーン…

な…なんなわけ

あんのバカは〜（怒）

「ちょっと…うるさ…？」

玄関開けたら息を切らした真帆と水城だった。

「バカ…里…桜。ハア」

はあ？いきなり何？

「お前携帯切ってるだろ」

「ああ！充電切れかな？」

「そんな事はどーでもいいから早く行くぞ！」

「どうしたの？」

「お前の容疑者が公園に」

「ほら角の公園のベンチ」

「えっ？酔ってるの？」

「女と寄り添って髪撫でてたぞ！」

なんですって〜（怒）

同窓会の確率なんか信じてなかったのに〜

私は玄関に掛けてあつた傘を掴んで走りだした

「里桜。雨ふってない」

「わかってる。あの馬鹿殴るのよ。」

容疑者（後）（6 / 25）

公園は街灯が一つしかなくて少し薄暗いけど確かにベンチに修司と縦巻きロールの長い髪にミニス力をはいた女性が寄り添っていた。

3人でソツと垣根の裏から背後に回り込んだ。

息を潜めて会話を聞く

「みつちゃんさ。あの頃から犬ところみたいに可愛いかったけどまた磨きをかけたな。」

「フフツ。修ちゃんたらお世辞が上手くなって」

「そんな事ないマジだよ」

修司…口説いてる…

「修ちゃんだつてモテてたじゃない。隣の女子高のマドンナだつて修ちゃん狙いだつて…」

「いやいや、俺なんかより告白三昧だつたじゃないか」

「そうね…でも…一番好きだった人から告白されたかったな」

「みつちゃん。俺は…」

見つめ合う二人の距離が近づいて修司の両手がみつちゃんの肩に掛かった

もう見てられなかった。

その時、私の中でプツンと限界の音がした

「あんなって人は〜(爆)」  
飛び出した私に驚き2人の距離が離れた。

「おお前なんでこんな所」

「浮気現場押さえにきたのよ。それとも本気？」と傘を突きつけた。

「ば馬鹿言うな。みつちゃんは高校の同級生だ」

「同級生だったら尚更でしょうよ。青春のど真ん中の一番輝いた時間を一緒に過ごしたんだから」

悔しくて悲しくてガマンしてた涙がポロポロと地面に落ちた

真帆と水城が支えてくれ泣き崩れないですんだ

「あの？」

控え目な声に顔をあげるとみつちゃんが微笑み  
「本当に同級生なだけですよ。私の片思いです」

「でも修司だってさっき抱き寄せようと…ヒック」

「お前馬鹿だな」  
と修司に抱きしめられ

「あれ以上近づいてこないように止めたんだ」

「えっなんで？」

「ハア…みつちゃん。自己紹介してやって？」

「ウフツ。オイカワミツナリ及川光成です。性別は未だに」

「えっえええ」

「俺ら、男子校だったの」と修司の呆れた声がした。

## 大事「おおごと」(前)(6/26)

今日は修司が休日出勤

2人で、同居するようになって半年(同棲とは絶対的に言いたくない！)

生活のリズムにも慣れてきたなあなんてぼんやり考えながら夕飯の下ごしらえしてたら卵をすべり落とした。

あっ！！ベチャ！

あーあ最後の1個が

しょうがないな

買い物リストに加えて後で買ってこよう！と思ってたら母からの電話。

いつものように母のマシニングトークが始まった。

あーあ長話確定。

ご近所さんや親戚の噂話や近況報告だったからまたかと思いつつ新聞広告を見ながら聞いていた。

夕飯はトンカツにしようと思っ塩コショウしちゃったしそのままソテーもやだな…

電話が終わった後

どうしてもサクサクの衣が食べたかったので近所のスーパーに卵を  
買いに走った。

買い物終えて帰ってきてみると修司は帰宅してて

「あつ帰ってきてきてたんだね。お帰り〜」っていつものように声かけ  
たけど

.....。

こちらに背中を向け立ち尽くしたたまま返事がない。

もう1度声を掛けようとしたら急に振り返り

「なんで1つしかないのに大事にしないんだ!!」と凄い剣幕で叱  
られ驚いた。

あつ?卵落としちゃったのバレバレ?

「うん...ごめんね。」

「どうして俺に頼らない」

「えっ!?!だつて私1人で済むことだし大丈夫だよ」  
買ってきてつて頼めば良かったのかな?

「俺にもつと頼れよ!」

「まあそんなに言うなら」今度から買い物頼もう。

「良かった〜もうどこにも行かないよな？な？」

「えっ？うん行かないよ」

もう買う物ないし…

そんなに涙目で懇願するほど留守にした覚えはないけど？

…今日の修司は変だった。

大事「おおごと」(後)(6/27)

そっと抱きしめられ

「大事にするからずっとそばにいてくれ」

ボツと一瞬で赤面するようなセリフ。

なんだかプロポーズみたいじゃない？

気のせいだろうけど…

「修司なんか変だね？」

顔を見ながら話せば

「何が？」

「やたら心配するしさ」

「あたり前だろ。もういいんだ。隠すなよ。俺は里桜の口からハッキリと聞きたい」

わかってるくせに今更？

「ごめんね。修司がそんなに卵大事だなんて知らなくて…」

「大事に決まってるだろ」

「…落としてごめんね」

「…っ！！お落ちたのか？」

「うん」

「馬鹿やろ…辛かっただろ？一人で…ごめんな」

あれ？卵落としたから怒ってたんじゃないかった？

「あのさ修司の話の根底はどっからきてるの？」

これ！と差し出されたのは広告…だけど？

「あっはっはっあはは」

「お前笑い事じゃ（怒）」

「それ、勘違いだっ〜」

広告裏に卵、産む、離ればなれ、引っ越し…

「それトンカツ作ろうとしたら1個しかなかった卵落としちゃって卵買いに行こうと思ってたら母から電話きて近所の犬が産んだとか単身赴任で引っ越しとかさ。まあ世間話メモっただけだから…あははっ」

「なな何だよ〜俺はお前が妊娠してシングルマザーを選んだと思っ  
たし…堕ちたんだと思ってマジ悲しかったんだぜ。俺1人勘違いし  
てバカみたいじゃないか」と真っ赤に

「フフッ」これからは買い物も頼むね」  
「…っ！…！」

今日は修司の優しさがわかって良かったよ。  
ありがとうの気持ちを込めてギュッと抱きついた

修司の危機（1）（7/9）

最近里桜がおかしい。

妙にウキウキしてる。

原因はわからなかったけど楽しい事でもあったんだろうとほっといたのがいけなかったのか…？

別に聞くつもりなんか無かった。なのに風呂から上がってドアをちよっと開けた時にちょうど電話の会話が聞こえてきた。

「アキラくんカッコいいよね〜いいな〜」

はっ？アキラって誰だよ

今まで聞いた事ないし転勤の時期でもないから会社の取引きの奴か？

「うん。えっ？本当？絶対応援に行くね」とメモってるし…

スポーツ選手か何かか？

「えっ？修司は仕事だから連れてかない。フッフ有給取って私だけ行くね」

てことは平日だよな？

「でさ…終わったらアキラくんお持ち帰りしてもいいかな？」

ああゝ（怒）

お持ち帰りって何だよ！

「本当？ゝありがとう。一生離さない…帰してって言っても返さないから…だって…初めて会ったあの日からずっと待ってたんだもの」

「…っ！」

何でだよ…そんなにアキラがいいのかよ…オレってアキラに負けたのか？

「やっぱり無口な所とか、キレイな顔とか」

オレは営業だから無口なんか無理だ！顔はイケメンと言われる事もあるみたいだけどキレイ系じゃない……里桜の幸せの為ならオレが身を引いたほうがいいのかもしれない

里桜の理想って芸能人の中でもナルシスト的な奴なのかと思ったら益々自分自身に自信が無くなってきて震えた…

あつ！湯冷めしたんだ…

心身共に凍えそうだったからもう一度風呂に入り直して対策を考えた。

このままアキラって奴に負けてたまるか！里桜を奪い返してやる。

くそおゝ

打倒アキラだー！！

## 修司の危機（2）（7/10）

（平常心平常心）と唱えながら何事も無かったように

「風呂気持ち良かったぜ」

と後ろから声かけたら

ビクッと里桜の肩があたり

「も〜吃驚させないでよ」

と顔を上げた里桜の目は赤くなっている

「お前…泣いたのか？」

と思わず聞いたなら

「あつ…ちょっと嬉しい事があったから…」

と頬を染めたのを見てギョッと抱きしめた。

オレの今の顔は嫉妬の怒りでとても見せられなかったから…

里桜が寝静まってからリビングに戻ってメモ帳を見たがはがされた。  
た。

筆後があったから鉛筆で擦ったら日時と場所が浮かんできた。

それをはがし手帳に挟んだ

数日後、里桜と同じ日に有給を取ったオレ。

今は里桜を尾行中…

普段のカッコだとバレたらまずいからと友達のバンドやってる弟に一式借りた…がサングラスしてパンク系のカッコは目立つ…

カッコはアッシュ系の金メッシュが入って逆毛。

スカル柄のTシャツに皮のパンツとジャケット

アクセも多少じゃらつかせ知り合いとすれ違ってもわからないはずだった

「あれ？修司さん？」

「はっ？あっ…人違いです」

逃げようとしたけどつかまった…受け付けの川村さんだった…急ぐからと口止めしてその場は追及を逃れた。

けど里桜を見失った…

場所はわかってたからそこに向かえば大丈夫だと思ってたオレはバカだー

デツカイ建物はカルチャーセンターのような所で教室やミニホールでいろいろな講習会や発表会が行われていた。

速く探さないとアキラをお持ち帰りされてしまう

里桜…早まるなよ  
祈る気持ちで片っ端から扉をあけ探し始めた。

修司の危機（3）（7/11）

扉を開ける度に悲鳴があがりなぜか捕まりサインや握手を求めてくる人もいて足止めされて思うように進めない。

「オレ…芸能人じゃないから勘弁して下さいよ」

と言ってるのに

「またまた〜売り出し中の人でしょ。」

「アナタならすぐに売れるわよ」

「私、ファンになりました。」

阿保か〜オレは一般市民だからファンなんかいらなんだって〜

芸能人ってかわいそうだとつくづく体感した。

もうダメだ〜。

お姉さんやおばちゃん達のパワーには叶わねえ

こうなったら正面入り口から出て来るのを待つてアキラと2人きりにしないように邪魔しようと思った。

ちょうど向かい側に喫茶店があるのが目に止まった

時計を見るとここに入ってから2時間、もうすぐ3時になる。

コーヒー一杯で粘れないからサンドイッチやスパゲティを頼んで時間を稼いだけこのカツコのせいもあり居心地悪い。

はあ〜里桜早く出てこい

それから30分後

(里桜…!?)

やっと出て来た里桜を見てオレは固まった。

出掛けて行った時とヘアメイクも変わって洋服もジーンズからワンピースになっていた。

おまけに里桜が楽しそうに会話してるのは数人のグループのよう  
で全員人目を引くようなカッコいい奴らばかりだった

ハッと我に返り急いで喫茶店を出て見つからないように後をつけた。

ただひたすら見失わないように…

アキラと2人で消えていかないように…

修司の危機（４）（７／１２）

尾行つて言っても里桜以外は知らない奴らばかりだし夕方で人通りも多し普通に着いて行く事にした。

だから自然に会話が聞こえてきて

「里桜ちゃん、打ち上げいこうよ」

「駅前の居酒屋だからこい」

「遠慮しなくていいよ」

と誘われてるようだ。

「ん〜遅くなると…」

と里桜。

「あゝ例の彼氏か？」

「うん」

「電話してさ、飯喰って帰るって言えば？」

「「そうだ、そうしなよ」「」

みんなに言われて折れたのか

「うん。そうしようかな」

と言って携帯電話を取り出しかけ始めた

〜

当然オレの携帯が鳴るわけで通話ボタンを押すと

「修司？」と里桜の声が

「お…おどした？」  
焦りで声がうらがえった

「友達とご飯食べてくから遅くなるね」

交差点で信号待ちの会話中に大音量の派手なキャンペーンカーが目の前を横切つてく。今売れてる外国人演歌歌手のだった。

慌てて通話口を塞いだ。

目の前の里桜が

「もしもし？聞こえた？今ね、目の前をキャンペーンカーが通ったの」

「ああ聞こえたよ」

はあ〜近くにいろってバレなくてよかった

「あっ！」  
「飯」

「ああゆっくりしてこいよ」  
「」

「ありがとう。じゃね」

ピッ……

…はっ！ゆっくりってなんだよ〜オレって馬鹿だ

半分落ち込んで着いてきた居酒屋で運良く里桜達の真横の席になった。

衝立で仕切られてるから立ち上がらない限りお互いに見えない。

里桜と3人…あの3人の中にアキラって奴がいるのか？…

「では、お疲れ様〜」

ビールで乾杯しながら会話が進んでいくが、アキラの名前が出てこない…

枝豆つまみながらこっちもビール飲んでるけど…不味い。探偵の方々は毎日こんな事してるのかと思っただらため息が出た。

…精神的に疲れる

本日2つ目の職業体験中

## 修司の危機 (5)

アキラが誰かわからないままお開きになり駅前解散のようだ。

「じゃ里桜。今日はありがとな」

「こっちこそ楽しかったし洋服もありがとう」

「いや、気にするな。それより送って行かなくていいのか？」

「大丈夫。いざとなったらアキラくんに助けてもらおうからフフッ」

「アキラ登場したら相手もビツクリするかもな」

それから里桜はみんなに背を向けて一人で帰っていった…

お持ち帰りのアキラは？

トイレでコインロッカーに預けたスーツに着替えてパンクセットをロッカーに突っ込んだ。

明日友人に鍵を渡して取りにきてもらってと…

急いで帰ろうと走り出そうとしたら右手を掴まれ振り返ってみるとさっきまで里桜といた男の1人が睨んでいた。

「…っ！なんですか？」

と軽く右手をふり掴まれた手を離れた。

「お前：里桜のストーカーか？」

「えっ？何でオレが…」

「パンクのカッコして夕方から付きまどってたる」

「げっ！！バレてたのかよ…」

「あんたこそ誰だよ？」

「ああ俺はね里桜の従兄弟の龍馬」

「あっ！たまに里桜が口にする龍兄？」

「そぞ。それ俺って：お前：里桜のなんだよ？」

「いやゝあのこれにはワケがあつて…」

しょうがないから名刺を出し電話で聞いた内容で不安になって尾行した事を正直に話した

「フッ」

何だよその笑いは…

「アキラもう家に行ってると思っけどね」

「えっ」

「あいつカッコいいから唇ぐらいは奪われてるかもね」

「ぶざけんな！…」

コイツにかまってる場合じゃなかった。

走り出したオレに

「アキラはそう簡単に手は出さないから大丈夫だぞ」と笑いを含んだ声が聞こえた

修司の危機 (6) (7/14)

オレは走りながら里桜との出会いを走馬灯のように思い出していた。

取引先の受付の子だったから月に何度か会社訪問で顔は知ってた

可愛いなとは思ってたが彼氏がいるだろうとあまり気にもしなかった。

それがあの日、同期会で行った居酒屋からの帰り道で駅横の路地で争ってる男女がいた。

人目もあるし痴話喧嘩だろうと素通りしようとしたら前を歩いてた女が路地に向かって歩きだし

「あゝ…お…兄さん？」

と話かけたから妹が間に入ったから収まるなと思ったら

「あつ？テメエ誰だよ」

へっ？他人？

「フフツ私は誰かな？」

「バカ野郎俺が聞いたんだ」

「あらあら怒っちゃダメ

」  
ノンビリ話す女に相手の男は益々イライラし始めて声が大きくなる

「人バカにする話し方するんじゃないねえ」

「凄い大声大会優勝！おめでとうございます」  
と男の片手をとり上にあけ、更に

「応援されてた皆さんに一言どうぞ」  
と言ったものだから

クスクスゲラゲラいつの間にか集まってきた野次馬が一斉に笑い出し  
恥ずかしくなった男は喧嘩してた女を連れて逃げ出した。

バカなのか？あんな強面に話しかけるなんて人が多いし大丈夫だったからいいようなものを…

考えてたら女が振り向いたそれはあの受付の子だった。

酔って怖いもの知らずの状態だったらしい…

とは後日談

あれからなんだか心配になったんのがキツカケだったんだよね

って今も現在進行形で危ないんだった

里桜…オレ別れたくない

修司の危機（終）（7/15）

今回は家にいたらアウトだ。人目だつてないんだから助ける奴なんかない

龍馬さんの知り合いらしいから無理強いはしないと思うけど、どう転がっても男なんだから信用なんかできるわけないだろ

まったく…オレはマジで里桜に捨てられるのかもしれない…

あの部屋も元々は里桜が住んでた所にオレが押し掛けたようなものだし家賃とかは折半だけど家主は彼女だしなあ…

いざ彼女の方から出て行けと言われたら立場弱いんだよなオレ

現に何度か閉め出されて情け無い状態が…

マンションについて階段を数段飛ばして駆け上がって部屋についた。

急いで鍵でドアを開けて

「うわあっ!?!」

目の前には暗闇に浮かぶキレイな顔の男がいた。

くそおゝ間に合わなかったのかと膝に手をついて呼吸をととのえとるゝ

「あつお帰り〜フフツ驚いた？」  
と脳天気な声と共にパチツと照明をつければ

「な…なんだよビビった」

「やっと我が家の一員になったアキラくんです  
と紹介されたのは……。」

龍馬さんは美容師。

里桜は前々からおねだりしてたコンテストで使ったメンズヘッドを  
貰ってきた事

龍馬さんの友達のヘアメイクのモデルにもなったと嬉しそうに話  
してくれた

頭だけのマネキンもどきじゃ手もないし…

龍馬さんに遊ばれたと同時にアキラって誰だ？と一言聞けば良かつ  
たんだと悟った。

だけどあと一言

「里桜、頼むから玄関に生首もどきを置くなよ。怖いから〜」  
マジ怖かった〜

暗闇に浮かぶ生首もどき

「生首じゃない！アキラくんよ」とヘッド抱きしめホッペチューの  
里桜を見て心底ホツとした。

修司の危機（終）（7/15）（後書き）

実際にアキラは我が家の玄関に置いてあります。初めての訪問者は  
昼夜問わずビツクリします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4848e/>

---

ラブでコメディな関係

2010年10月11日15時36分発行